

浜寺公園の宮武外骨

関西大学人間健康学部准教授
浦 和男

大阪の外骨

稀代のジャーナリスト宮武外骨は、明治三十三年四月十二日から大正四年九月十日まで、大阪で暮らした。大正元年八月十五日から三年九月五日までは浜寺に自宅を置く。妻八節がバセドウ病を患っていたことから、大阪毎日新聞社主本山彦一の薦めで、空気の良い浜寺公園での生活を始めた。すでに大阪市内は「煤煙の都」と化し、「大

三年九月五日に、再び本山の薦めで、やはり空気の良い天下茶屋の「天下茶屋遊園」に新宅を構え、一年後に上京する。

大阪市内では、着阪時には天王寺西門そば、その後伶人町に移る。現在の大阪サレジオ修道院の向かい側のあたりであった。三十五年三月に江戸堀南通二丁目に移り、ろくでもないことが続いたというので、支援者のひとり、「ピットル胃酸」を販売していた猪飼

史郎所有の四丁目の邸宅へ移る。現在の花乃井中学校の西北の向い、エトーレ江戸堀あたりの地であり、ここが「滑稽新聞社」の地であり、後に「雅俗文庫」が開かれる。ちなみに、こ

その江戸堀を去り、まず外骨が落ちて着いた先は、浜寺公園の料亭旅館松浜館の離れの一室であった。外骨は「浜寺公園日記」と題する自筆メモを残しており、「日本古書通信」昭和五十八年八月号に、宮西豊也が「宮武外骨の新資料」と題して翻刻を載せている。大正元年八月十五日午前に大阪を出発、午後には浜寺入り、妻、娘、手伝いの娘の四人連れである。「離座敷二階八畳二間借入(一日二円) 食費一人一日六十銭の割、五十円豫メ預入ル」(翻刻原文ママ)とある。九月二十七日までの日付があり、約一ヶ月を松浜館で保養し、浜寺での「宮武外骨公式住所」となる「浜寺公園二十八号」す

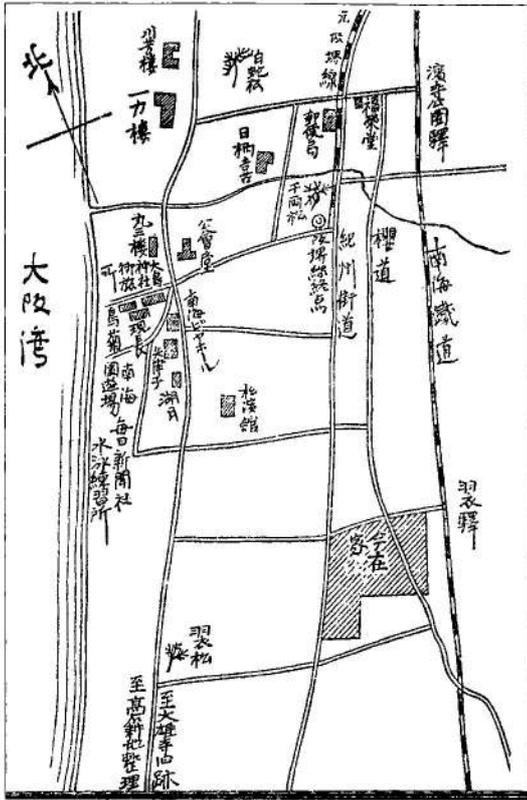
浜寺の外骨

の「滑稽新聞社」の前、おそらく現在の中学校の西北角、タカハシビルあたりと思われるが、この地の家に明治三十八年から四十二年にかけて住んでいたのが、幼い日の梶井基次郎である。花乃井中学校の地はかつて江戸堀尋常小学校、外骨はびかびかの一年生の基次郎を目にしたはずである。梶井一家が上京する時には、基次郎の頭を撫でて声をかけたかもしれない。江戸堀時代の外骨の「滑稽新聞」は、大阪の政界、経済界、社会、文化に大きな影響を与えた。筆禍により大阪控訴院で戦った相手は、手塚太郎。漫画家手塚治虫の祖父である。

なわち「大阪府泉北郡高石村今在家九百六十四番地」に移ったと思われる。今在家は現在の羽衣一丁目と三丁目あたりだ。羽衣駅は明治四十五年開業、当時は「今在家駅」であった。外骨が浜寺公園に移った頃は、まだ真新しい駅舎であった。

浜寺の外骨邸の位置は、まだわからない。「日本の古本屋」で古書を検索したさいに、在野の禅僧釈宗活が「浜寺公園三十一号」から発信した手紙がビットした。年代がわからないが、同じ頃に浜寺の外骨邸の近所に積が滞在していた可能性は高い。残念ながら、二人の交友関係もわからない。

外骨の「浜寺公園日記」と題されたメモには、松浜館に訪問した人物、外骨が訪問しに出掛けた人物の名前が残されている。外骨の弁護を務め、養女三千代の実父である弁護士の日野国明夫妻、担当医師はもちろんだが、意外なことに、三好貞司の『大阪人物辞典』に「犬猿の仲」と書かれている。大阪日報社主吉弘白眼夫妻の名前が書かれている。八月二十日に「午前不在吉弘来訪」とあり、これが最初の来訪となっているが、十六日に外骨は十六人に絵葉書を出しており、そこに吉弘の名前もある。二十三日は夫人が訪れ、「菓物一籠、三千代同行して人形、袋、紙リボン等もらふ」と、仲の良さがかうかわれる。二十七日に吉弘が来訪、九月十三日には「吉弘方三行」とある。



「浜寺名勝」(大正五年、高石温故会)掲載の浜寺地図。中央に松浜館がある。

吉弘は、明治三十七年夏に浜寺に転居、九月には『松之浜寺』を吉岡寶文館から上梓している。吉弘には、外骨の養女三千代の上下一つ違いの娘が二人おり、二人が交流をしていたのも、同い年の子供という共通点があったからだろう。当初は「天猿の仲」であった二人は、いつの頃からか交流を深めていた。

外骨と本山の交流がいつ始まったかも、よくわからない。大正十五年に発行された『浜寺海水浴二十周年史』（大阪毎日新聞）掲載の地図を見ると、「羽衣松」に隣接して本山邸が記されている。外骨の浜寺転居は本山の助言によるのだが、吉弘が浜寺に居たことも影響をしていると思われる。「天猿の仲」である人物が住む場所へ、のこのこと転居するような外骨ではない。残念ながら、外骨を取り巻く大阪人たちの関りのタイミングが、なかなか見えて来ない。外骨は、大阪毎日新聞が浜寺公会堂で開催した講演会のうち、大正三年八月二日に「進歩の窮極」という講演を行っている。一回だけなので、本山へのお義理による登壇であろう。この会では、薄田泣菫も「男と女」という題で講演している。

外骨の人脈

明治末年に、外骨を経済的に支援し、交流を深めたのは小林一三である。大正二年四月二十五日から、小林の援助で『日刊新聞「不二」』を発行する。

十月には『月刊雑誌「不二」』の刊行が始まるが、この頃には小林との関係が弱くなり、本山らの支援が強まるようだ。小林から離れるのは、小林の親分である岩下清周の経営する北浜銀行の疑獄問題が表面化してきたからではないかと考えている。この点は、拙稿「大阪の宮武外骨」（『水門』第三十号、勉誠出版に掲載予定）で論じているので参照されたい。

この日刊紙に短歌、文芸批評などを掲載されたのが、当時今宮中学の教員であった折口信夫だ。記者の一人、大林華峰との天王寺中学つながりというが、同級生であるかどうかは、よくわからない。折口の処女小説「口ぶえ」は、『釈道空』の筆名で『日刊新聞「不二」』の大正三年三月二十四日から四月十九日に十九回掲載された。この折口と今宮中学で同僚であった石丸梧平が中心となって「文芸同攻会」を設立、折口も外骨も講演を行い、折口は「暗面生活に於ける言語意識の進化（性慾篇）」なる題で数回連続で講演をしている。

この石丸と折口の文学仲間が驪城卓



『月刊雑誌「不二」』第四号（大正二年十一月）掲載の島成園「絵が好きだ」。

爾、「カルピスは初恋の味」を創作し、折口の後任として今宮中学に着任。彼に漢文や作文を教わったのが、藤澤桓夫、武田麟太郎、林廣次（秋田實）らである。このつながりを見ると、浜寺の外骨が大阪文壇に大きな影響を与えていることになったことがよくわかる。

月刊誌の『不二』は、南方熊楠、大月如電といった在野の大学者、社会主義運動家の山口孤剣、大阪歌壇の重鎮小野利教ら、蒼々たる人物の寄稿に交じって、北野恒富、上村松園、そして島成園の絵が掲載されている。養女三千代は松園に絵の手ほどきを受けていた。恒富の紹介で成園も絵を描いたのであるが、関秀画家として苦勞を重ねていた松園、成園がその後大成するのを見るに、外骨は画壇にも影響を残したということになる。

外骨の厄年

大正三年五月から『興味雑誌「奇」』を発行する。創刊号の中表紙に、浜寺の外骨邸の写真が掲げられている。第三号の巻頭の一文に「弊寓は浜寺公園内の公会堂ビヤホールのつい近傍に有」云々と書かれている。当時の地図を見るかぎりでは、公会堂は今在家からは離れており、「つい近傍」というのは、歩いて行ける距離、程度の意味であろう。この号の巻末には「延刊の理由」があり、「去一日浜寺海水浴場の開場当日から三日続けて游泳し、三

日続けて冷ビールを飲んだため、腸カタルを起して一週間ほどの臥床」と書かれている。浜寺の外骨が、すっかり浜寺の生活を楽しんでいたことがわかる。第四号が浜寺での最後の号となる。この巻末には「今年厄年」という一文があり、腸カタルは「臍の緒を切って以来の大病」という。さらに、「瘰癧といふ指の病」で「一週間程は日夜苦悶の痛さ」であった。そして、「今年は百度近い暑さ」、撰氏三十八度の暑さの日が続き、「弱り目に祟り目」であったとぼやく。そして、第五号で天下茶屋転居を報告する。

浜寺公園時代の外骨は、『滑稽新聞』時代以上に大阪文化に深い足跡を残しているとも思える。埋もれた史実であるので、ぜひとも「浜寺公園の宮武外骨」を浜寺公園史に刻み込みたい。



『奇』創刊号中表紙掲載の浜寺外骨邸と外骨の写真。